校友會誌

第二十四號

昭和八年三月

滋賀縣立彦根中學校

校友會誌

第四十二號

校友會誌（第四十二號）目次

口　絵　第四十五回卒業生　野球部

校　歌　學校長　足立芳之助　一

御親閲を拜受して　あだち　二

驛頭所見　足立芳之助　三

新滿洲國の生誕

◇論　説

國難と我等の覺悟　五年　久木彌惣八　五

北邊の危機に際して青年諸君に檄す　三年　西村正作　六

新興日本青年の使命　藤關平三郎　九

約を守れ　山田敏雄　一〇

世界の滿洲　西村英男　一一

蜻蛉目一般について　四年　建部俊夫　一二

蟻の習性　三年　居長賢藏　二三

みもりの觀察　二年　竹林博　二五

假名遣改定案私考　特別會員　平井乙磨　三一

御親閲を拜受して　五年　西田亮三　三九

多林慶藏　四〇

藤田一義　四一

郡田浩次　四二

三橋文男　四三

夏川文二郎　四四

上松信一　四五

北川宗四郎　四六

越智健吉　四七

柴田正巳　四八

辻村彌太郎　四九

竹内禪眞　四九

塚田英夫　五〇

西村平次郎　五一

久木恒太郎　五二

新谷又平　五三

北村永一　五三

藤本利典　五四

横山正一　五五

小山喜衛　五六

西河德三郎　五七

國島惠瑞　五八

林　茂次郎　五九

四年　相場德三　六〇

田澤清一　六一

中村　弘　六二

西村久雄　六三

山本高次郎　六四

橋本末藏　六四

五年 保坂信吉 六六
林卓英 六七
田中澄司 六八
四年 吉田銀藏 六八
北川三津男 六九
丸岡芳之 七〇
大原一夫 七〇
高居寛一 七一
木下信一 七一
北川良市 七二
馬場弘一 七三
滿島啓二 七三
藤川愈 七四
羽根田辰男 七五
田中宗一 七五
三年 西島輝夫 七六
居長賢藏 七六
小山泰藏 七七
二年 中村晉次郎 七八
寺田太治郎 七八
中村隆 七九
安藤權一 七九
馬淵頼信 八〇
中堀正男 八一

◇文苑

さらば 伊吹義雄 八二
沈没せる潜水艦七〇號 廣部智彰 八二
青年雜感 一年 島本光高 八二
托鉢僧 藤田洋三 八四
節約に就て 湯本信良 八四
去り逝く心 西堀文吉 八五
凱旋將士を迎ふ 五年 丹田慶三 八六
同 小林弘 八七
同 佐藤正 九一
學年始めの所感 小篠一男 九二
同 國島惠瑞 九二
安田晋平 九三
四年 建部俊夫 九四
金子裕 九五
那須原邦男 九五
杉橋均五 九六
辻威雄 九七
同 有川紀久 九七
同 橋本末藏 九八
同 井上八右衛門 九九
同 片岡四郎 九九
故郷 田中宗一 一〇〇

同 齋藤數衛 一〇〇
同 井口敏彦 一〇一
同 丸岡芳之 一〇二
同 島本良三 一〇二
同 平居龍太郎 一〇三
同 西村久雄 一〇三
同 山田惠一 一〇四
十二月の午後 三年 西島輝夫 一〇四
銃を持つた時 居長賢藏 一〇六
臺灣思出記 上田良平 一〇六
優勝當時の感想 西川寛一 一〇八
小春日和 西島輝夫 一一〇
紅山流水 徳永正俊 一一一
スタート 井上顯敵 一一一
田舍の香 二年 杉山十三雄 一一三
寒念佛 林榮一 一一六
密柑 中村晉二郎 一一七
夏休みの思ひ出 島本八郎 一一八
除夜の鐘を聞きつゝ 安藤權一 一一九
新年を迎へるに當つて 加藤澄 一二〇
月 野村忠吾 一二一
或日の朝 廣部智彰 一二二
鏡餅 伊藤芳男 一二三
元日の朝 中島午郎 一二四
除夜の鐘 和田純乘 一二五
落葉 野村忠吾 一二五
渚に立つて 寺田太治郎 一二六
發車間際 中堀正男 一二七
滿洲事變 丸山吉夫 一二七
佐藤君へ 一年 金森從之 一二八
冬の夜 馬場國夫 一二九
Lodging at Zeze 五年 林茂二郎 一三〇

◇詩

旅愁 特別會員 大和田清朗 一三四
早春 四年 羽根田辰男 一三五
東亞の迷雲を掃いて 馬場弘一 一三六
思は深し滿洲や 三年 淺井晃 一三六
除夜の鐘 種村貞一 一三六
日本の兵隊 二年 杉山十三雄 一三八
輕業お日様 寺田太治郎 一三八
一年 望月實 一三九

◇俳句

朝霧と花屋 五年 佐藤正 一四〇
月 三年 西村英男 一四〇
除夜の鐘 二年 中島午郎 一四〇

◇短歌

臺灣行　特別會員　藤田一一　一四一
初夏　五年　丹田慶三　一四二
ココアと議論　四年　羽根田辰男　一四四

◇紀行文

第四學年關東地方修學旅行記　四年　中村弘　一四七
同　西村久雄　一四七
同　橋本末藏　一五〇
同　田澤清一　一五二
同　山本高治郎　一五四
同　相場德三　一五六
同　淺島昭　一五七
同　杉橋均五　一五八

◇便り

母校の諸君へたより　卒業生　淺島希一　一六〇
同　古川傳三郎　一六五

◇各部部報

劍道部　一
柔道部　八
端艇部　一三
野球部　一九
庭球部　三七
競技部　四〇
水泳部　五〇
學藝部　五九

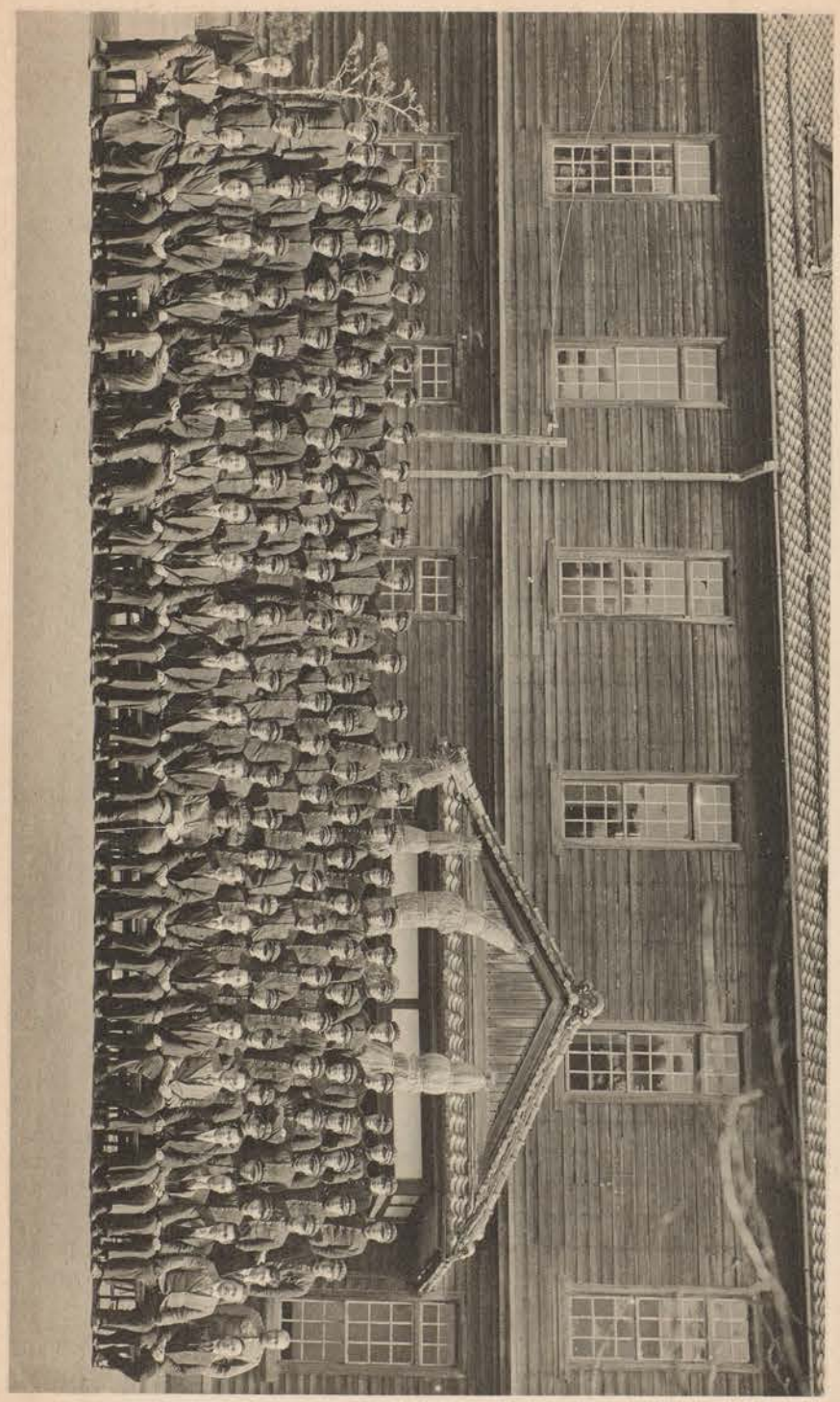
◇雜錄

學校日誌抄　六一
昭和七年度校友會各部役員　六六
會計報告　六七
編輯後記　六九

彦根中學校々歌

湖べの春にかざられて
雲ふきはらふ膽吹山
ふもとの若葉あたらしく
われらが園はかがやけり
綠しづけき學びやに
智德のとぼそ啓きつゝ
明はなれゆく人の世の
われらが窓に光あり
不撓の決意と力行の
わかき生命にまもられて
幸とほまれに美はしく
われらが園はかがやけり

剛健自助の門によりて
湖畔のまもり嚴かに
たてる金龜の學びやの
ああほまれある幾春秋
金剛不壞のこゝろもて
つとめ勤しむ森のかげ
われらが窓の燦爛と
ああほまれある幾春秋
天のかがやき地に享けて
こゝろ澄みたる琵琶の湖
金龜の春とともしへに
われらが園は新たなり



彦根中學校々歌

1=96

ヘ調四分ノ四拍子

5 5 1.5 | 3 2 1 — | 5 1 2 3.1 | 5 — — 0 |

ウミベノ ハルニ カザラレーテ
みどりし づけき まなびやーに
フダフノ サダト リツカウーノ
がうけん じじょの さによりーて

6 6 5.5 | 4 4 2 — | 5 3.2 1 2 | 3 — — 5 |

クモフキ ハラフ イブーキヤマ
ちさくの さぼそ ひらーきつつ
ヲカキイ ノチニ マモーラレテ
こはんの まもり おごーそかに

5 5 3 7 | 1 2 5 — | 1 2 3 4.3 | 2 — — 0 |

フモトノ ヲカバ アタラシーク
あけはな れゆく ひさのよーの
サチトホ マレニ ウルハシーク
たてるこ んきの まなびやーの

f

5 5 3.5 | 6 6 5 — | 1 2 3.2 | 1 — — 0 |

ワレラガ ソノハ カガヤケリ
われらが まどに ひかりあり
ワレラガ ソノハ カガヤケリ
ああほま れある いくしゅん秋

御親閲を拜受して

學校長　足立芳之助

八萬に餘る若人。誰を見ても喜色滿面、精氣潑剌。はち切れるやうな緊張さだ。

今日しも朝來寒風吹き荒み、空の模樣も曇り勝ち。驟雨さへも時に至つて、御親閲の有無も氣づかはれる。場を見やれば遙か彼方の玉座には、ささやかながらテントがしつらへてある。矢つ張り決行されるのであらう。さるにてもこの寒さ、この强風。この上雨にでもなれば、あれしきのテントが何にならう。でも無きには優ると、せめてもの心遣りとする。と、何うであらう。そのテントの屋根が、突如として、動きだした。訝かしく思つて見てゐると、擴聲機はいふ、——

「ただいま大本營から御電話がありまして　天皇陛下の御思召によつて　玉座のテントを全部撤去するやうに、との御事でありますので、御言葉に從ひまして、取り除くことにいたします。」と。

滿場寂として聲なく、ただ雙頰を傳はる熱涙を覺えるのみ。我等數ならぬ若人を、かくまでに深く御思召し給ふ大御心に、今更らのやうに感涙にむせぶのであつた。

大本營御發輦の頃より天候險惡となり、臨御の時にはぽつり、ぽつりと落ち始めた。雨中の御親閲。一天萬乘の我が　大君が、何千萬年といふ遠い神代の昔からの皇統一系の我が　大君が、冷雨の中に我等を御親閲あそばすのである。

行進は始つた。力が全身にぐんぐんと入つて、りんりんとした步調となる。「頭ら右」の號令一下、我等は渾身の至誠を天皇陛下に捧げ奉つた。身も魂も、我等の有てる凡てのものを、一物を剩さず一切を　陛下に捧げ奉つたのである。

仰ぎ拜し奉る　天皇陛下には、高き玉座に毅然として立御あらせられ、御英姿いとも神々しく、まことに恐懼感激の極みであつた。而も　陛下には、畏くも我等に御舉手の禮を賜つたのである。ああ、この大御惠み。——捧げても、捧げても、我等が捧げることの如何に有限微小にして、我等が　陛下より賜ることの如何に絶大無限なることよ。

元の位置にかへれば、心ゆるみてか、落つる涙とどめもあへず。——

驛頭所見

あだち

日本は勝つよ、この見送りの人のなみ

あかんぼう抱いた未亡人が先導して、遺骨

萬歳の洪水あびて勇士らの凱旋

默のみの支配する負傷兵の列車だつた

―昭和七年一月、二月―

新滿洲國の生誕

足立芳之助

新滿洲國が獨立したので小冊子を編んで教科書の足らないところを補修しこれが認識を正確にするため松田先生にお願ひいたし、すでに原稿もできあがり四月中には版になる豫定であつたのであるが、デリケートな國際關係をおもうて中止することとした。しかし先生の御研究は授業を通して諸子に傳つてゐることであらうし、出づべくして出でざりし冊子に對する先生のお骨折りに對しては深く感謝の意を表する次第である。

下文は予が當時その序にもとおもつて認めたものであるからそのつもりで讀んでほしい

皇紀二千九百三十二年は、世界史上に永遠に記念せらるべき一大事業を、東亞の一角に現出した。朔風なほ寒き三月一日、新國家「滿洲國」は奇蹟の如くすらすらと建國せられ、久しきに亘る暗黑の天地に、希望に輝く黎明の光りが訪づれた。

新滿洲國は、奉天、吉林、黑龍江、熱河、興安の五省より成り、面積百十六萬方粁、人口三千四百萬人を有する立憲共和國にして、長春（新京）を首都と奠め、元首を執政と呼び、年號を大同と創定し、紅、藍、白、黑、滿地黃の五色旗を以て國旗に制定した。

建國宣言文に依れば、東省の軍閥は中原變亂の機に乘じて政權を攫取し、狼厲貪婪、ただ私利をこれ圖り、その結果弊制は紊亂し百業は凋零し、あまつさへ關内の出兵、隣邦との不親善、盜匪の横行など暴政の極みであつたので、これら虐政から解放されて王道に則り、天に順ひ民を安んじ、もつて安居樂業の新理想境を現出せしめんとするのが、新國家建國の旨趣である隨つて新滿洲國は原有の漢、滿、蒙、日（鮮）の各族はいふまでもなく、その他の國人といへども長久に居住するものには平等の待遇を與へ、また條約上義務の繼續を承認し、外資の輸入を歡迎して門戸の開放と機會の均等の實を擧げんことを宣言してゐる。就中見逓すことの出來ないのは、「何をか民生と曰ふ、實に之を死に置くなり。何をか民權と曰ふ、維々利を專らにす

るなり。何をか民族と曰ふ、維々黨あるを知るのみ。……その往くところを縱まにすれば、やうやく共產に至り自ら亡國滅種の地に落ちるにあらざれば止まざらんとす。」といつて、正面より中華民國の三民主義からの離脫を宣言してゐることである。

劃期的の建國宣言を發表したる新滿洲國は、大同元年三月九日といふに、國都新京に於いていとも嚴肅に建國の大禮を擧げたのであるが、清朝末期の宣統帝が一平民溥儀氏として清朝發祥の地滿洲に迎へられ、初代の元首に推戴されて執政の職に就かれたとは、何たる奇しき因緣であらう。就任式に於ける執政の宣言は左の如くである。

「人類必ず道德を重んずべし。然れども種族の別あり。すなはち人を押へ己を揚ぐれば道德薄し。人類必ず仁愛を重んずべし。然れども國際の爭ひあり。すなはち人を損じ己を利すれば仁愛薄し。いまわが國道德仁愛をもつて主として種族の別、國際の爭ひを除去すべし。王道樂土まさに見るべし。この事實わが國人ともに努めよ。」

美しい、明るい新滿洲國は、安らかに生誕した。我等は衷心よりこれが生誕を祝福する。しかし新國家の前途には各國の承認問題、中華民國との關係等、等、幾多の難關が豫想せられる。此等の難關を一つ一つ、突破して、新滿洲國をして永遠に美しく、明るく成長せしめることは、容易の業ではあるまい。

顧つて靜思するに、滿洲は畏くも　明治天皇御遺業の地である。御遺業たる以上、我等は至誠奉公、もつてこれが彌榮を圖らなくてはならぬ。滿洲はまた我が特殊權益を保有するの所であつて、我が皇國の生命線である。生命線たる以上、その一點に一たび異狀が發生せんか、その異狀はただに一局部に止らずして、軈ては生命そのものを犯すに至らん。果して然らば、我等は滿腔の誠意をもつて新滿洲國の健全なる發達を祈るとともに、進んでそれが健全なる伸展を遂げさすべく最大の援助を與へることを忘れてはならぬ。

新滿洲國の重大性は、今や從前に倍加せられた。我等は正にこれが認識を新たにするの必要に迫られてゐる。諸子、幸に眼を滿洲の新國家にそゝぎ、以て天の與ふる「良機」に善處せよ。

——昭和七年四月一日——

論說

國難と我等の覺悟

久木彌惣八

二十世紀の不況の風は今や全世界の國々を吹きまくつて何時止む事で有らう。全世界は此の不況と血みどろの闘爭を續けて居る。財政經濟あらゆる國務の困難は何れの國も行詰りの狀態で有る。農漁村の疲弊、又會社銀行商店の倒產、一般國民の意氣銷沈、此れは本當に憂ふべき現象で有る。

過去の帝國を振りかへつて見るに、アジヤ大陸の東端の海邊に沿うて連なる小さな名も知らぬ島國で、其の存在も認められなかつた我國日本が、日清日露の大戰の結果一躍世界三大强國の一に數へられヨーロツパの一角より興り遂に全世界を震駭せしめて砲煙彈雨の中へと卷き込みし歐洲大戰に於て、おしもおされもしない强國の一となつた我が國ではないか。抑〻かゝる地位と國力とを得たのは何の力であらうか。其れは國民の熱誠忠烈鬼神も泣く兵の力ではないか。當時では廣瀨中佐橘大隊長等、近き例ではあの廟行鎭總攻擊の爲め愛國の犧牲者として身を以て、鐵條網を破壞したあの有名な肉彈三勇士等、我等には此れだけの力と意氣に燃ゆる大和魂がある。一朝事有る時は貴賤貧富を問はず一致團結以て國難に當り國家の爲めに盡す擧國一致の精神を有して居るのだ。

併し國民は歐洲大戰に於ける成功の結果あまりにも豪奢快樂に浸つた「驕るもの久しからず」此の言の如く驕るものは絕對

に長續きはしなかつた。我國はだん〳〵と景氣も惡くなり國力も衰へて來た。失業者は續出し國債は益々增す一方で、現在の經濟界は眞の不況のどん底に有るのだ。

振りかへつてかの獨逸を見よ！ 彼等は獨斷的な大野心に驅られて全世界の平和を破つて戰つたが併し失敗に終つた。其の結果は國民は國力を回復すべく一致團結して、朝早くから夜遲く迄働いたので有る。

斯くの如く彼等には不撓不屈の精神たる獨逸魂が有る。彼に獨逸魂有れば我に大和魂がある。固より我國の不況は獨逸のそれに比較さるべきではない。況んや我國の難局と云ふも一時的の經濟的苦境に過ぎない。併し我が國の人口問題と食糧問題を如何に解決すべきか？それは云ふ迄もなく我國の生命線たる滿蒙に有るのだ。日本は滿蒙に於て種々正當なる權益が有るのだ

我等青年は弱き心にとらはれず、我が權益掩護の爲に、否此の國難に際して大いに自重して全國民一致團結せば、國難は容易に解決するのだ。人生僅かに五十年、我等の心臟に刻むドキ〳〵と云ふ短き間さへ墓場へ〳〵と急ぐ。マフレド・ドラムと彼のワーザアースはうたつてゐる運命づけられた生涯に於て無暗に青春時代を過さず大に努力しようではないか。

北邊の危機に際して青年諸君に檄す

西村正作

今や世界のあらゆる人々の注目の中に國際聯盟は開らかれ軍縮會議はひらかれて、平和の手段は構ぜられ平和を讃美する聲は叫ばれてゐる、然れども歴史によつて徐に考慮すれば既往三千年の間に於て眞に平和と稱すべきは僅かに二、三百年にすぎざる事疑なき事である。この生きたる事實は何よりもよく列國の武備に怠りなく野心滿々たる事を物語つてゐる。されば遠き未來は暫く措きても近き將來に於て殊に現今の世界の狀態について見ても、一國の存亡を決すべき戰の絶えざる事は掌をかへ

すが如きである。而して戰の嵐は古くは彼の有名なアレキサンドル大王の時代に吹き、近くは、バルカンの一端より發した嵐は世界を完全に動亂の渦の中にまきこんでしまつひ、幾多の生靈を奪ひ幾億の黄金を呑んだ事であらう、此の恐しい嵐は又しても怪しげなる妖雲を世界の上にひくくひくく垂れこめて嵐の前の無氣味な靜かさを見せてゐる、即ち今より二十九年前に「ライト」兄弟によつて發明されたる飛行機は僅かの間に於て眞に秒に鞭うつて天馬の勇をかりて大發達を遂げつゝある現今は世界のあらゆる所は北は北極から南は南極まで東西は云ふまでもなく自由に飛翔されてゐる今日、赤露の魔手が、日本海オホツク海を經て、且つ、樺太朝鮮を以て直接境を接し、其の上、吾が特種權益を有し唇齒輔車の關係にある滿洲國と、餘り天然境なくして相接して、虎視耽々たり、而も彼は日露大戰の恥を雪がんと、不凍港を求めんと、世界を赤く染めんと東洋の干城日本に向つて天馬空を行くの勢を以て東洋に驀進しつゝあり、玆に於て日露關係の歴史を少しく考ふれば、如何にもその野心を赤らさまに物語つてゐる即ちペルリが黑船四隻をひき提げて、浦賀に來り當時の國民の膽を寒からせた嘉永六年を去る一百年許前より既に交通はされてゐた樣である。これより前第十六世紀の中葉露帝イワン四世はコザックの酋長イエルマクをして白雪降り積むシベリヤの曠野を彼等の獰惡なる蹄にかけて侵略せしめ、更に第十七世紀の中頃には、いよ〳〵東洋征服の野心に燃え、トムスクを根據として一望千里の草原をかけめぐりてカムチヤツカをその手に收め、更に清國の北境に迫り、ネルチンスク條約を締結し國境を協定により當時の清國は强大な軍を國境に送りて防備を嚴にしたので、彼は一時手を休めたが、其の後清國に起りし內亂のため北邊の武備に弛みを生じたのに乘じて再び東方侵略に心を用ひ、その手段はいよ〳〵積極的となり、當時の東部シベリヤ總督ムラヴィヨフは清朝に迫つて愛琿條約を結び、更に餘勢を驅つて浦鹽斯德を建設して極東活動の根據地とせり、これより先我が國へもレザノフ伯は來寇して、天地を震駭させ、その後幾度か我が北邊に寇し、流血の慘禍は年を追つて、增えて我國人をして益々憎露心を增さしめた、かくして明治八年遂に涙の內に實力の差は如何ともする事能はず樺太千島交換條約は結ばれ、彼の毒牙は更に滿鮮方面に向つて延ばされ、吾が國が財力を竭して贏ち得た遼東半島を東洋の平和に藉りて根こそぎに持つて行かれた、あつ何んたる悲哀ぞ、尊き生靈と、國民の多大なる負擔によりて購はれたる遼東半島を、然し實力の差は如何ともする術なく、大官の東奔西走も甲斐なく、涙の內に遼東半島を還附させられし當時の人々否吾等

の祖先、先輩の心中を追想するだに涙を催すのである、然しそれも束の間彼は完全に滿洲を手中に收め、鐵道を敷き、大兵を送り、旅順、浦鹽には要塞を築き、更に東洋艦隊を游戈せしめて飽くまで我を壓迫し、その第一歩として遂に友邦朝鮮も泥靴で踏みにぢらうとし、豪雨前一風の靜けさな無氣味な妖雲を兩國の空に送らんとしてゐた。果せるかな遂に日、露、兩國は戰端を開いた。而して皇軍は滿洲の野に夏は燒けつく炎天の下に、草木に赤い血を染め、冬は駒の蹄も氷る樣な雪中に血を流し征戰二星霜、遂に陸に海に大勝を博し、續いてポーツマス條約は締結せられかくして日露關係の第一幕は閉じた。

併しこの位の事で彼の東洋侵略の計畫が挫折しようか、彼は第二の日露戰爭を目標に鋭意專念武備を充實し大軍を集中し、浦鹽要塞を改築しつゝあつた。然し此の時幸か、不幸かセルビヤの一青年の發つた數發の彈丸は忽ち全世界に擴り、遂に全世界は砲煙彈雨に包まれて、修羅の巷と化して終ひ日露の國交は鞆當から握手へと一變した。

間もなく露國に革命が起り其の禍を我が國にまで及さんとし、遂に西伯利亞に出兵して獰惡なる過激派軍を迎へ討ち、茲に又しても幾多の尊き生靈は雪の曠野の露と消えさり護國の鬼と化してしまつたのである。而してこゝに新しくソヴエート聯邦が呱々の聲を上げて、我が國との國交は恢復した。併し兩國間の空模樣は果して拭ふが如く快晴に復し得たであらうか!!

彼は今や世界を惡化せんと世界の干城日本に向ひ盛んに魔手を延してゐる事は度々の共產黨員檢擧が明らかに物語つてゐるこの恐しい赤化の魔手を誰が根絶し得るのか?、これを征服するには諸君青年の心に潛んでゐる日本魂をおきては何ものがあらうか?、目醒めよ青年、奮へ青年、彼の滿洲征戰の勇士に何の顏あつて見んか。何の努力を以て尊い血に報ゆる事が出來るか、今や彼は廣々たる外蒙古をば掌中に修め、勢力東漸に力を用ひ、露滿國境に十萬の大軍を集中し、百五十臺の飛行機、戰車等を集め、今度の皇軍滿洲里入に對し少からぬ不滿を持ち防備をさ〳〵怠りなく、皇軍と僅かに黑龍江アルゲン河の濠一つ隔てゝ對峙し、怪しげなる空氣は北滿の空一杯にみなぎつてゐる。而してこの滿洲國の嚴然たる存在こそ眞に名實共に我が國の生命線でありひいては世界赤化防止の一大障壁である、この大事な滿洲國の承認こそ世界平和の第一歩だ。この滿洲が今や危機に際してゐるではないか!! これから大困難は敵ひかぶさらうとしてゐるではないか!! 聞け老いた首相の血を吐く聲を!! 偲べ滿蒙を吹きすさぶ興安嵐の下に今日も戟とり日本を守る將士の姿を!! 東亞の風雲日に〳〵急なるぞ、今が一期の飛躍の時

だ、國民死活の秋だ、世界の危機だ、北邊の危機迫る、時は來た我等青年の活躍すべき舞臺は今將に夜が明けんとしてゐるではないか!!

（一九三二・一二・二〇）

新興日本青年の使命

藤關平三郎

諸君！ 現在我國は非常時にあります。非常時とは、常にあらざる時と云う意味であります。此の時代において我等青年は如何にして此の難關を打開すべきか、我等は第一線に活動しないから此の事を考へる必要はないぢや無いかと云ふ人もあらう、然しながら如何に國が强くともその國内の國民が一致團結しなくては戰に勝つ事が出來ないと同樣に第一戰に立つ人人が如何に熱辯を振はれても我等青年が唯何等成す事なく得々としてゐられ樣か、かくの如く平凡なる人が國難を打開し國を脊をつて立つ事は不可能だと思ひます。故に私は新興日本青年使命について聊か所見を陳べたいのであります。諸君！ 彼の獨逸の鐵血宰相ビスマルクは何と云ひました。「我に汝の國の青年を見せよ、我汝の國の國力を斷ぜん」國家の如何を問はず、人種の差別をいはず、國家の實力は我等青年の双肩に懸つてゐるのであります。かくの如く新日本の責務は實に重、且大であります。新日本の意氣と力は日本青年の意氣と力であります。露國は赤化主義を以て、全世界を統一せんとしてゐます。米國は黃金を以て世界を統一せんとしてゐます。英國、佛國は科學を以て世界を平定しようとしてゐます。然らば我日本は如何?、日本は飽くまで邪を制し、青年の常に其の胸奥に持つてゐる抑へがたい正義を以て世界を統一すべきだと思ふ。諸君！ 然らば青年の使命とは何か?、彼の白虎隊を想へ！ わづか十七、八の少年志士だつたのであります。戸口原に敗れた白虎隊殘員十有七名が劍を杖に飢ゑと疲勞をなめて、然かも意氣少しも衰へず、鮮血に雜草を染めながら蘚崖巖然たる山路を潛行して飯盛山に登り、

烟々と火を放つてゐる鶴ヶ城を拜してたふれたのです。かくの如く青年には團結心、犧牲心、共にマツチの樣に常に時をうかがひ時來らば其の身を犧牲にしても、光を放つのである。此の樣な精神を有する我等青年が、一身を唯平々凡々にすごすのは國家の非常な損害だと思ふ。又東亞の平和は徐々に成りつゝあります。我國が世界の何れの國より早く滿洲國の獨立を承認したのも一つに此に有ると思ふのである。滿蒙三千萬の國民の理想の的は完成されました。そして極東の平和は一歩、一歩、其の行程を力强く進んで居ます。東亞の黎明には矢は、はなたれた。その天業を然らば誰が繼ぐか？、老人は仆れる、成人もやがて老朽します。故に此の後繼者は將に來るべき新人青年の双肩にあるのです。太陽の登らんとする意氣に滿ち、青年のやるべき愉快な事業は、まだ〳〵多大に在ると思ふ、然し此の大業を全うする事が我等青年の使命では無からうか？、否私は此れが新興日本の青年の使命だと確信するのであります。

進め！ 諸君！ 昭和の青年よ！ 我らの未來は大きいぞ。

（一九三一・一二・二二 完）

約を守れ

山田敏雄

人は約束を重んぜなければならぬ。一度約に背く時は先方へ迷惑をかけるばかりでなく、我が意志の薄弱なことを示して、甚だしく自己の信用を損ふものである。信用の重んぜねばならぬことを考へたら、約を守るの必要はよく判るであらうが、約を破るは、はじめより約を輕んずるからである。

故に何事でも他と約束せようとする時は、その前に、その事の正否と、わが力の及ぶべき事か否かをかへりみなければならぬ。そしてこの二つに對して滿足な答へを求め得たら直ちに約束してもよいが、若しさうゆかぬ時は、躊躇することなく「否」

といふべきである。かくて、一旦約束した事は全力をつくして、之を遂行する所に男子の眞面目は存するのである。

古諺に武士は「二言なし」とあるはこゝをさすのであらう。

「諾」といふ前によく考へぬと、「二言なし」の訓はとても守れまいと思ふ。しかしよく考へると、人には過失がある。一旦約束したことでも、後になつてそれが不正のことであると心附いた時などには、よくその理由を述べ、身の不明を謝して解約してもよい筈である。惡と知りつゝ、之を中止せぬは、却つて、男らしからぬ行ひではないか。

世界の滿洲

西村英男

竹越三叉氏は次の如く云つてゐる。

「我が大日本帝國の將來は北に有らずして南に在り大陸に在らずして大海に有り日本國民の注目すべきは太平洋を以て我が湖沼とする大業に有り」……と。

大正時代はこれでよかろう否明治の時代は等しく國民の注目して居たことで有らう。

其の時代はすぎた。今は昭和の御代だ太平洋にのみ注目して居つたのでは我が大日本帝國は永遠に安全とは云へまい。

日本國民の注目すべきは太平洋を以て我が湖沼とする大業に有りと云ふよりもむしろ新進之國滿洲國をして我が生命線とする大業に有りと云つた方が適當ではなかろうか？否さうでなくてはならぬ。今日我が日本國民の希望の的となつて居るのは即ち滿洲國でなくて何であらう、行け！、若人！、滿蒙の地に！、前途有望なる滿洲國へ！、そして我が大日本帝國の意氣を世界に輝かすのだ。

蜻蛉目一般について

建部俊夫

一、分類　蜻蛉目を分けて左の二亞目、五科とする。

第一亞目　不等翅類

前後翅は稍形狀を異にし、後翅は大である。靜止時の翅の位置は、之を体側方に開き水平に置く。幼生の呼吸は直腸部氣管鰓に依る。

イ、蜻蜓科（やんま）　前後翅の三角室の形狀が畧等しい。その三邊は、前緣最長内緣最短である。第一圖Bは本科昆虫の前翅を示したものである。幼生は長形幼生である。（幼生に就ては幼生の形態の處參照）

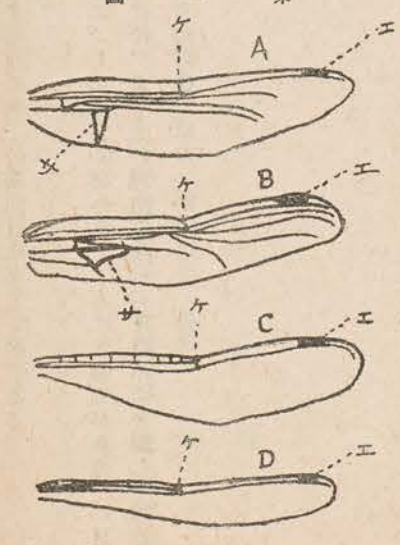
ロ、蜻蛉科　前後翅三角室は著しく異り、前翅三角室は前緣最短なれども後翅にては内緣最短なり。第一圖Aは本科昆虫の前翅を示す（エ）は緣紋（ケ）は結節、（サ）は三角室である。幼生は短形。

ハ、昔蜻蛉科　普通ならざる故に省畧す

第二亞目　接翅類

前後翅殆ど同形で三角室を有せず、靜止時は四翅を脊上に接して体と斜又は直角に置く。幼生は細小な長形幼生で体の後端に三個の呼吸鰓

第一圖



を有する。

二、河蜻蛉科

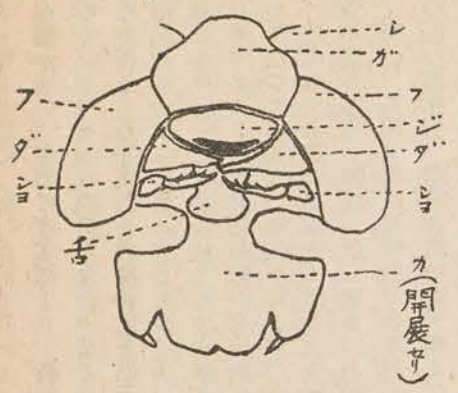
体は極めて細く多數の小細室を有する大翅を具へ、腹部は緣色又は銅色をなす。幼生は直腸鰓をも併せ有する。第一圖Cは前翅の畧圖。

ホ、豆娘（いとんぼ）科

形態前者に似るも更に小である。更に重要なる區別點は第一圖Dに見る如く結節前横脉の數が彼に於ては數個乃至十數個なるに比し本科のものは僅に二個を有するのみである。翅底は有柄である。

二、成虫の形態

第二圖



代表的なものとして「ぎんやんま」に就て見ると。

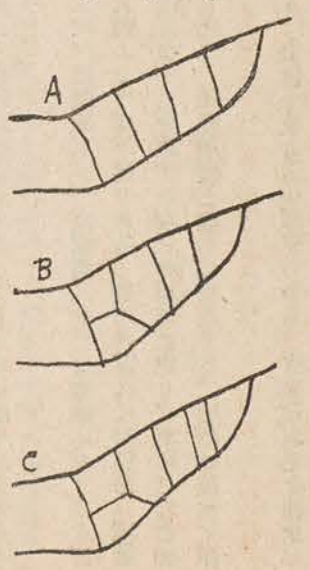
イ、頭部　一直線にて接する複眼一對が頭部の大部分を占め、其の前方に一對の短小な鞭狀觸角と觸角の間に三個の單眼を有する。又下面には嚙咬用口器を有する。

第二圖は頭部下面の畧圖で（ガ）は顏面（シ）は觸角（フ）は複眼（ジ）は上唇（ショ）は小顎（ダ）は大顎（カ）は下唇である。顏面内部には神經節（腦神經節）があり、二條の神經に依つて食道下の喉下神經節に連り、更に二條の神經に依つて胸腹の神經節を連ね、神經連鎖と成つて後走する、頸部は極めて細い。

ロ、胸部緣色の三節より成り、全体で最も太い部分である。表面は短毛を粗生し脊上には種々の形狀の隆起がある。各節に一對の肢と、後二節に一對宛の翅を具へる。肢は赤褐色をなし、基、轉、腿、脛、跗の五節より成るが跗節は更に三小

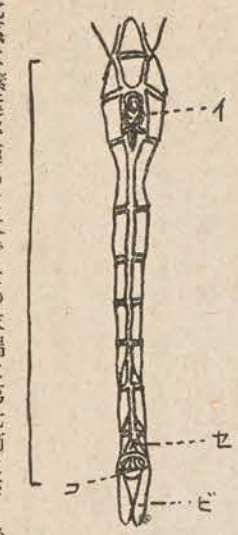
節より成り末端に二個の曲爪を具へる。翅は膜質で細い網狀脈を有する。前翅は稍長くして五二、五糎、後翅は二粍計り短いが幅が廣い。各翅には基部より一糎計り外方に稍大なる三脉に圍まれた三角室がある。その形狀は前述の如く第一圖Bでその中に三乃至四の横脈を含む。又その横脈中最内側のものが内方に屈折しその屈折點と内緣湾とを結ぶ脈の發達せるものが有り（第三圖にてはAは然らざるもの、B、Cは今此處に言ふ例）、又奇異なるは同一の本種の雄でも左右兩翅でその脈形が違ふものの

第三圖



ある事である。次に各翅前緣の畧中央に在つて、脈が集合した樣な形に成つて居る太い横脈が在るが、之を結節と言ふ。（第一圖のケ）此處にて各翅共稍前方に曲る。次に各翅より僅に内方前緣にある不透な部分を緣紋（第一圖エ）と稱し本種では雄は長さ約五粍、幅〇、八粍で色は黑褐色であるが、雌は長さ約八粍を有し淡褐色を呈す。此の部の消化管、即ち食道は甚だ細く、且その壁は極めて薄く透明で、しかも强靱である。而して此の体中で最も太い部分たる胸部を充す物は翅及肢を動かす所の大なる淡褐色の筋肉である。

第四圖



ハ、腹部　十節より成り第三節中央部迄は雄にては鮮かな青色をなし雌は赤褐色その他は褐色である。此の部は甚しい延長形で、第一第二節最も太く、第三節中央細く縊れ、第九第十節は最も小である。第三節より第八節に至る六個節の背面に各一對の氣門を開き、氣管が体内に扁く分布して居る氣管は銀白色に輝き之を低度の顯微鏡で檢するときちん質の輪が側壁に存在するを認められる。

消化系は嗉囊が極めて大でその末端は第七節に至り從つて肝盲管も此の位置を占める。之に續く乳糜胃は比較的小さく、第八節端に終り長毛狀のマルピギー氏管を附屬する。

雌雄共に第二節背部に生殖腺を有し、其の輸精管、輸卵管は第八節の湾で消化管を廻り、腹側に合一して第九節に開く。雌は生殖腺開口を以て交接器とするが、雄は別に第二節腹面に陰莖と呼ばれる交接器を有する。腹端には一對の攫握器（尾鋏とも尾脚とも言ふ）を具へ雄は之が甚だ發達して交尾の用をなす。第四圖は雄の腹部腹面を示したもので（イ）は第二節に在る陰莖（セ）は生殖腺開口（コ）は肛門（ビ）は尾脚（攫握器）。

三、雌雄淘汰

蜻蛉目昆虫は既に述べたる如く雄が陰莖を有するので、手に取つて見れば雌雄の區別は瞭然としてゐる。併し色彩上から雌雄の區別を考へるのも興味が有る。概して本目昆虫は雄雌に於て形態の變化少く、又色も變化が少いものであるから雌雄淘汰なる用語は少々不適當であるかも知れぬ。

或種に於ては本來に於ては雌雄の區別であるべき色彩の差異が個体に依て異り、兩性の色の混同したものもある。即ち最も普通に此の邊に見られる「しをやとんぼ、しをからとんぼ」等は雄は青白色、雌は黃褐色が標準色とされて居るのに「しをからとんぼ」等は極めて變化多く黃褐色の雄を捕へる事もあるのであり、又「しをやとんぼ」は湖岸地方では殆ど標準色の雌を見る事が無い。「はらびろとんぼ」は雄は黑色、雌は黃褐色が標準色であるのに余の所有する標品に就て見ると黃褐色の雄二、雌一、青色の雄二、黑色の雄一。即ち標準色の本種は唯一番（つがひ）のみである。斯く變化の多いものである。

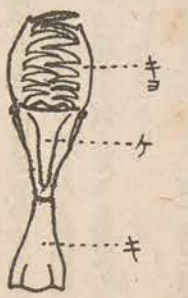
之に反して明かに雌雄の色彩別の一定せるものは「あかねとんぼ」類、殊に「あきあかね、しやうじやうとんぼ」等で雄は美麗な赤色、雌は黃褐などのくすんだ色である。「あかねとんぼ」類中「まゆたてあかね」はその翅端が雌では淡褐色であるから容易に見分けがつく。（但し此の特徴の無い雌も稀には有るとの事である）又形態の處に擧げた「ぎんやんま」も此の例に屬する。「かはとんぼ」は雄は四翅共に美麗な橙赤色であるにかゝはらず雌は遙に淡色（殆ど無色に近し）で動すれば同形で四翅共に無色である所の「やなぎとんぼ」と間違ふ位である。豆娘科のものは多く雌は雄より大で殊に「あをいととんぼ」などに於て著しい。

四、生活史の概略

イ、孵化――幼生　夏季より秋季（七月より十月）に亘り産卵された卵からは、旬日にして細小な變形衣魚型幼生が孵化し數回の脱皮を經て一對の複眼と、翅の痕跡と、六肢を有する幼生（俗稱やご）と成る。前者即ち變形衣魚型幼生を前にし一期幼生、後者即ち「やご」をにんふ期幼生と稱する。

ロ、幼生の形態　環節數は成体に等しく、体は概ね泥色をなし（保護色）胸環節は小三角形の翅の痕跡を示す。頭部下面を見ると先づ目に着くのは其の著しく發達した下唇である。即ちその基節並に莖節は甚だ長く成り、基節は附着部より後方に向ひ、莖節がその端にて前方に折れ向ひ頭部前端に達する。之をマスクと稱せられる。マスクの莖節の前端には通常一對の可動鋏狀葉を具へ、その先端は尖り又幾個かの齒を有する。此の鋏狀葉の最も著しいものは「おほやまとんぼ」等で第五圖はマスク並に鋏狀葉の開展圖であるが、（キョ）は鋏狀葉（ケ）は莖節（キ）は基節で其の鋏狀葉の齒は六個を算し先端は顏面を敞ひ兜の鍬形の如き觀を呈して居る。

第五圖



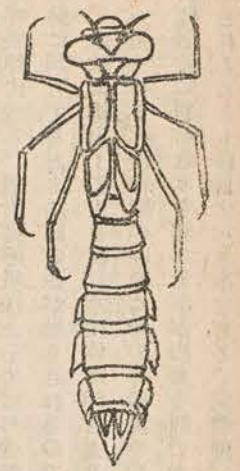
呼吸器は不等翅類にては直腸附近に稍大なる氣管が分布し、その一部は直腸壁を貫いて直腸内に入り込み複雜な氣管鰓を構成する。接翅類にては最後腹節後端にて体外に突出して居る三個の呼吸鰓（扁平なる紡錘形をなす）に依るが、河蜻蛉科昆虫にては前記不等翅類の有する直腸部氣管鰓をも併せ有するのである。

不等翅幼生は体に短形、長形の區別が有る。余は幼生を採集した上での經驗から之は科の特徴に關係しないだらうか（恐らく長形幼生は蜻蜓科、短形幼生は蜻蛉科のものに違ひ無からう）と考えて居た。處が偶然にも文庫にある松村氏の昆虫大圖鑑を調べるに及んで此の考へが正當である事が確實と成つた。依て最初の分類の處にも發表した譯である。

次に余の所有する標本の數種に就て見ると。

ぎんやんま　大型の長形幼生で、体の全長五一粍、頭部は上部扁平、マスクは莖節の長さ約一一粍、鋏狀葉の齒は二對。腹環節は七、八、九節の兩側に突起を有する。肛門附屬器は尖る。（第六圖は本種の背面圖）

第六圖



至第八節に鈎狀突起を第七乃至第九節に側方に尖鋭なるが翅が割合に小さく見えるのは立つて居る爲である。

「しをやとんぼ」　小さい短形幼生。体長二一、五粍、第五腹節の幅六、五粍。概形前種と異らないけれども其の最も大なる差異は鋏狀葉の形狀に在る。第九圖Aは本種の背面圖、Bは其の鋏狀葉の開展圖である。（第五圖と比較して見ると甚しい相異がある）。即ち其の齒は極めて微小で僅に膨大なる鋏狀葉其のもの丶嚙み合せ面に八個計り存在するに過ぎぬ。

「ものさしとんぼ」　体長一三粍、呼吸鰓の中片の長さ九粍、体色は黑褐。口器は莖節の長さ二粍計り。觸角は細くて三、五粍呼吸鰓は三個共形狀大さ畧等しく、其の正中線に相稱なる黑色の模樣がある。（第十圖Bは本種全体、Eは呼吸鰓の一）

「はぐろとんぼ」　前種と形態異らず。第十圖Aの如くである。唯呼吸鰓は中片短く、側片が大である。Dは呼吸鰓の側片。

「いととんぼ」　形態最も前種に似る。体は遙に小である。呼吸鰓中片は遙に側片よりも小。側片にのみ正中線に相稱なる模樣のあることも亦前種に同じ（第十圖C、F參照）。肢が濃褐淡褐のだんだらに成つて居ることも特徴である。

ハ、幼生の生態

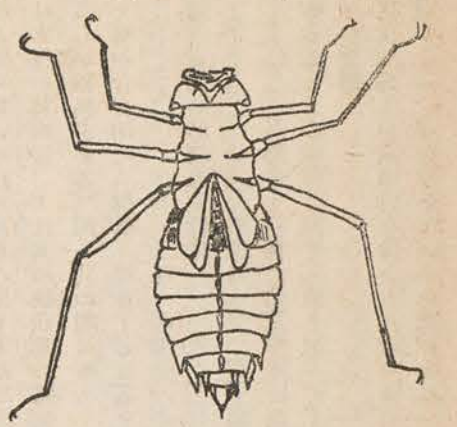
本目昆虫の總てが成体時を除いて水棲である。從つて他の水棲昆虫が而るが如く本目昆虫の幼生に就ても亦急流型と靜水形の二種がある。唯だ本目に言ふ急流型とは「ぶゆ」の幼生の如き急激な流水中に棲むものでなく、清流型と言ふ可きかも知

あをとんぼ　前者より稍小なる長形幼生で体長四四粍。マスクの大さは大差無し。鋏狀葉の齒は二個で小さい。腹部各節は突起を有せず漸次尾端に向ひ細まる。觸角は太短く五粍計りある。（第七圖參照）

「おほやまとんぼ」　大型なる短形幼生である。本種の著しき特徴とする所は前述せる巨大の鋏狀葉と、至つて小なる複眼である。体長約四一粍、第四腹節の幅一六粍に達する。腹部には背面正中線上に第三乃至第八節に鈎狀突起を有する体には黃褐色微毛を疎生する。第八圖は本種の圖である。

第七圖

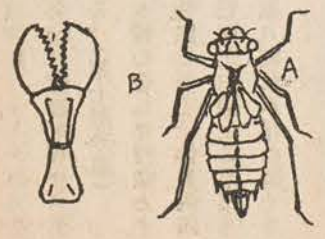
第八圖



れぬのである。而して此の清流型に屬する種類は「みやまあかね、おにやんま、こしぼそやんま、かとりやんま、みやまかはとんぼ」などで有る。総て山間の溪流、川の上流、清冽な小川等に多い。靜水型は他の総ての種類を含むもので湖岸に棲むものは清流型に近いものであらう。

不等翅類幼生は巧に砂土中に潜伏し、食餌を得る事が出來、又敵から自身を防禦し得る。湖岸に住む「あをとんぼ、よしとんぼ」等は多く蘆葦の繁茂した根際の砂中に居り、又防波堤などの岩石の間にも住む。接翅類幼生は多く体が軟弱であるから常に藻の間やまこも等の植物の根際に身を潜めて居る。「やご」は運動が不活潑で跳梁することが無い。奪掠生活を爲す食肉性動物にかゝはらず斯様な避隱的生活をして居るのであるが、捕食時には矢張り少々の活動をする。捕食は其の保護色を唯一の頼みとし、マスクを唯一の武器（捕食器）とし、追跡性でなく待機性である。其の食物としては体の大小により小昆虫（ぼうふら、ゆすりか幼生など）小甲殼類、小魚、おたまじやくし等が選ばれる。呼吸法としては既に述べた如く不等翅類にては直腸部氣管鰓接翅類にては尾端の呼吸鰓に依る。氣管鰓呼吸法としては外骨骼を伸縮して、直腸部に水を出入させるので、之は水鉢に飼育するときは底の砂が散らされるので良く分る。尙茲に注目すべきことは其の呼吸した水を急激に排出するときは、幼生体は浮き上りつゝ前進し得る事で、之は不等翅類運動法の重要な一法で有る。接翅類の呼吸はその呼吸鰓の中片を靜止し、兩側片を開閉するので有つて斯くすれば各片に新鮮な水を與へる事が出來る譯である。直腹部氣管鰓が河蜻蛉科のものに在つては併用されることも注目すべき事である。氣管鰓、呼吸鰓の構造等に就ては研究不充分の爲暑す

第九圖



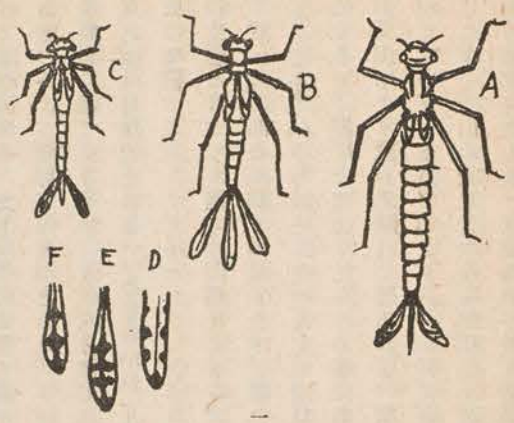
る。

兎に角幼生の飼育と言ふ事は實に興味ある事である。補食法や呼吸法も斯くして始めて知り得る事で、幼生の名稱も飼育を行つて孵化させねば明にすることは困難である。尤も水鉢で飼育し得るのは靜水型のもののみで急流型のものは水に酸素が不足するから飼育出來ない。特別な設備——堀拔井戸でもあれば申し分無いが、其れすら無い吾々は如何とも仕方が無いので未だ出來ないで居る

二、幼生の羽化　充分成長した幼生は水邊にある草木、岩石、杭等に攀ぢ登り、確りと曲爪を踏ん張つて靜止する。暫時にして頭部では頸部に續く部分が之と共に直裂し、胸部も亦背上正中線に於て頸部と等しく直裂する。頭胸部に續き白色にちぢれた翅が表れると、生体は上方に反り、腹部が急に延長する。腹部が急激な成長を止めると生体は更に上向して幼生殼の頭部を越し附着物（生体のつかまへて居るもの）を摑む。而して生体が安定すると始めて腹部末端を靜に殼（幼生殼）から拔き出し、數歩の距離を歩んで靜止する。其のうちちぢれた翅は白色の脈が次第に黑ずんで展り、脈間の部分が次第に透明と成る。之と共に体色も黑味を增し遂にきらきら光る四翅とつややかな外骨骼を具へた一匹の若々しい蜻蛉と成るのである。幼生の羽化は主として午前中で、種類に依つて三月から八月に行はれる。之が即ち蜻蛉の出現期である。蜻蛉目の最も出現期の早いものは蜻蜓科の「さなえとんぼ」類、晩いものは「あきあかね」である。本年の三月廿九日に余は荒神山麓で「さなえとんぼ」を取つた。本種によく似た「ひとすじさなえ」は四月上旬多數羽化し、道路上を飛ぶ。

ホ、交尾、產卵　成長した雄は精液を生殖腺開口より陰莖に移し、雌を求める、而して都合よく雌に會へば飛行中に雄は尾脚を以て雌の後頭部を摑む。雌は腹部を出來るだけ曲げて生殖腺開口を雄の陰莖に密着せしめ互に其部分の小攫握器で離れぬ

第十圖



様に他を摑み茲に受精が行はれる。飛翔力の發達した彼等は飛翔し乍ら空中で手際よく交尾を終る。無論此の姿勢でも樹木等に靜止し得るのである。受精を終へた雌雄は唯雌は腹部を伸して生殖腺開口を離し、其の儘の姿勢にて今度は產卵に取りかゝる。勿論受精は短時間に行はれるものでは無くして數時間乃至數十時間の交尾の間に精子は雌性生殖巢に浸入し既に核（雌雄兩性の細胞即ち精子と卵子との）の合一が濟み將に分裂を開始せん狀態に在るのであらうから、交尾の濟んだ後暫時に於ては体外に排出、產付せられても良い譯である。扨產卵であるが之には大体三つの方法が在る。即ち水中に產み放しのもの。水藻の葉裏などに附着せしむるもの、而しても一つは最も念の入つたもので水生植物の莖を穿つてその中に產卵するもの〻三法である。此の三通りに就て例を言へば、第一のものは「あかねとんぼ」第二「ぎんやんま」第三「かはとんぼ」を擧げる事が出來る。尤も產卵の姿勢も第一の類（產み放し）のものには雌雄が分離してゐるのが普通である。第二、第三類にも雌のみにて產卵するものもある。

次に產卵期に就てであるが、之は八月初旬乃至十月初旬に至るものと考へられる「ぎんやんま」の最も產卵の多い時間は八月中旬乃至九月初旬である。「あきあかね」は九月中旬乃至十月上旬である。

五、成虫の生態

成虫の生態と言つても極めて漠然たるものであるが、此處には最も普通なる本目昆虫約三〇種に就て各論し、一般的說明を省く。從て此の部分は餘り系統立たず、思ひ着くに任せて記すものである。

おにやんま類、「うちはとんぼ」などは夏日水邊に多くて甚だ速に水面近くを飛翔する。之等は夕方も出るが主として晝間活動性である。湖岸ではよく見られる事であるが、之等は湖中に立てられた鰻釣りの竿に止つてゐる事がある。その竿と言ふのが又湖岸より數百米離れて居るので、斯樣な遠方を何度も往來する彼等の飛翔力は驚くべきものである。之等は出現期間が短くせいぜい七月中旬より八月一杯である。又、おにやんま類、殊におにやんまは、清流型であるので湖岸にも住むが又山地に多い。山の阪などで往復回轉して居るのは多く本種である。「うちはとんぼ」は寧ろ泥水に住む樣で城の濠にも良く見受ける。「ぎんやんま」は蜻蜓科中最も普通な種類で又前種「おにやんま」と共に最も大形の蜻蜓である。又害虫驅除には

最も効果的な種である。本種はよく風の凪い夕方などには、幾百と無く湖岸や街路上に群集し、蚊を取つて居るのが見られるが、其は大体日沒の前後に集るので日沒後暫くすると四散して終ふ。之は此の時刻に出現する蚊の習性に左右されるのであらう。八月から九月にかけて一番宛の本種が水邊に交尾姿勢の儘で產卵して行くのはよく見かける事である。出現期間は稍長く、十月上旬にも見かけた事がある。「あをとんぼ」（あをやんま）は本目中よしとんぼと共に稀に見る綠色種で湖岸に多い種である。良く蘆葦の上等を飛んで居る事がある。湖岸を離れた地方では殆ど見る事が出來ない。概して高翔性で自分の今もつて居る標本は夕方屋根の棟の上で活躍して得たものである。「かとりやんま」（かとりとんぼ）は日中や夜間は木の葉に果實が成つた樣にぶら下つて居るもので嘗て八月に伊吹に登つた時、麓の伊吹村で流れの傍の木に非常に多數の本種が靜止して居た。本種は夕方軒の廻りなどで蚊を探すものであると。之は体の細い割に翅が薄く廣く、而して腹部第三節は細く溢れ、其他の環節に美しい斑紋がある。飛翔は極めて緩慢である。之は清流型で從て上野邊には多いのであらうが自宅では八月中旬に一頭を採集したのみである。

「さなえとんぼ」類は前述の如く最も早く出現する種類でその中で「あをさなえ、さなえもどき」等と言ふ種は稍出現が晩い。「おほやまとんぼ」は蜻蛉科に屬するが体形極めて大なる爲、動すれば蜻蜓と間違へる位である。然し前翅三角室の形狀からして蜻蛉科なることは明かである。最も各地に普通なるものは「しをからとんぼ、しをやとんぼ、で、しをからとんぼ」の黃色なるものは「むぎわらとんぼと稱せられる。雌を「むぎわら」と言ふと言ふ人があるけれども既に雌雄の本來の色彩が混同して居る以上斯樣な事は言ひ得ない。「むぎわらとんぼ」の出現を最初（一年中でのこと）に見たのは本年の修學旅行にて五月六日横須賀軍港にて見たものである。「しをやとんぼ」は湖岸の河岸に最も多い。出現時期は八月より九月。「おほしをからとんぼ」は稍山地性の種類で自分は最初摺針峠の坂で採つた。後むぎわら色のも採つたが自分の標本ではどうやら前種と違ひ雌雄の區別を成して居る。「こしあきとんぼ」も良く目に着く種類で、之は庭先や門口をぐる〳〵と廻つてゐる。此の名前は第三乃至第五節の色が異り他の節（腹部）の黑色に對して空いてゐる樣に見えるからである。此の三箇節の色は濃黃より白色に至る迄あり、又其の色は各節の前部だけで後部が黑色なのもある。「てふとんぼ」は名の如く悠長な飛翔をする

のである。四翅共黑色であるが、唯先端のみ無色である。六月頃桑畑の上などを高く舞つて居る。「しやうじやうとんぼ、うすばきとんぼ」は共に七月頃出現し、公園運動場にも多い。しやうじやうとんぼの雄は美しいが雌は黃色であるから「きとんぼ」と間違へる事も有る。「きとんぼ」は四翅の或る部分も鼈甲色で美しい。余は本年犬上川の靑柳橋の北で見つけ三回の採集を試みたが皆失敗した（十月下旬より十一月にかけて）「はらびろとんぼ」は最も棲息地域の限定されて居るもので、此の邊では珍しい種類に屬する。体長四〇粍、開翅六五粍計りの可愛らしい蜻蛉で、腹部が左右に擴り、一寸愛嬌がある。之は色彩の變化が甚だしく旣に擧げた通りである。「あかねとんぼ」類には此の邊で「なつあかね、まゆたてあかね、みやまあかね、あきあかね、のしめとんぼ、このしめとんぼ」等が採集出來る。「なつあかね」は五月より出現し「まゆたてあかね」も六月中旬には普通である。後者は顏面に二箇の眉の如き點がある。雌は通常翅端が黑い事も旣述の通りである。「なつあかねは八月末より出現する「あきあかね」と頗る酷似して居るが其の區別點としては、下唇中片及び雄の尾部下附器（尾脚は尾部上附器とも稱しその下部の畧同樣なる器官）は前者は黃色なるに反し、後者は黑色である。「なつあかね、あきあかね」共に隨分晩く迄生存するもので自分は十二月十日に「あきあかね」の雌雄を捕へた事がある。「みやまあかね」は翅端に近く幅廣い茶色の帶があり飛ぶ時には輪を畫く樣に見える。清流型の典型で春照村、伊吹村等には普通である。「のしめとんぼ」類は翅端が黑褐である。之等も出現期の晩いもので秋の野に跳梁する蜻蛉目昆虫は「あきあかね」と本種とであらう。總て「あかねとんぼ」は小型であるが中でも「なつあかね、まゆたてあかね」は實際可憐な感じのある蜻蛉である。「はぐろとんぼ、かはとんぼ、やなぎとんぼ」は總て淸流を好む傾向あり、殊に「かはとんぼ」は實際は山地性である。雄は翅が美麗である。之等は湖岸より一里計り上流でなければ棲まない。「はぐろとんぼ」には緣紋が無い。「いととんぼ」や「ものさしとんぼ」は總ての地方に產する。「きいととんぼ」は湖岸近くに最も多い樣である。体がれもん黃色で六月七月頃稻田の緣の間を縫つてひら〳〵と飛んで行くのは實に美しい。「あをいととんぼ」は体が稍大で九月頃に多い。之も湖岸には棲まない。体が金緣色であるが後頭部、胸部の下半部などが黃色であるから「おほいととんぼ」と區別することが出來る。（終り）

蟻の習性

居長賢藏

地球上の多くの生物中に於て我等人類が最も發達してゐることはいふまでもないが、その文明は組織的な社會によつて造られてゐると思ふ。

勿論人類といつても、白色、黃色、黑色等色々の人種あり又それ等の發達の程度も種々樣々である。然し大体に於て共同的生活團体により互に協力して優秀な（萬物中に於て）社會を作つてゐるのは同一である。

我々が斯の如き組織的社會を造つてゐるのに比べて蟻も又或組織的な社會を造つてゐる非常に興味の多い動物である。そこでこの動物をもう一段詳しく觀察すれば。

一、階級、蟻が組織的社會により生活する上に於て第一に考へさせられるのはこの階級といふことである。

それは次の三つがある

A　生殖階級……子孫繁殖を行ふ。

B　勞働階級……食料供給及び營巢。

C　警護階級……警衛を司る。

以上の中A即ち生殖階級は雌雄兩性の一階級であつて、專ら生殖のみを行ふ。又Bは職蟻によつて行はれ、Cを行ふものは兵蟻とも言ふべきである。然し、職蟻は色々と勞働をする上から見ても警護階級の任務も不可能ではないと思はれる。